

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第
	号	

氏 名 赵宏刚

論文題目 現代汉语代詞主観化研究
(現代中国語における代詞の主観化)

論文審査担当者

主 査 名古屋大学准教授 勝川 裕子
委 員 名古屋大学教授 丸尾 誠
委 員 名古屋大学教授 杉村 泰

論文審査の結果の要旨

論文の意義

現代中国語における代詞は、人称代詞(“我、你、他”など)、指示代詞(“这、那”など)、疑問代詞(“谁、什么”など)の三種類に分けることができる。文法機能について言えば、代詞には体詞性のもの(“我、你、他、谁、什么”など)と述詞性のもの(“这样、那样、怎么样”など)があり、一般的にこれらは代替機能を果たすものとされている。しかし一方で、代詞がこのような本来の代替機能を果たさず、専ら発話者の態度や評価——即ち主観性を表す事例も散見される。例えば“还看电视，看什么看！赶紧写作业！”[まだテレビ見てるの？何見てるの！さっさと宿題しなさい！]における“看什么看”は、発話者が知りたいものや事情について聞くために用いられるものではなく、聞き手に対する<不満>の気持ちを表しており、構造中の“什么”自体、もはや「疑問」という文法機能を果たしていない。また、“那些无非是恐吓，不管他。”[それらは脅してしかないから、放っておけ。]における“他”は、ここでは三人称代詞ではなく、“不管”という否定構造と共起することで、行為・事態に対する発話者の<無関心>な態度を表している。

趙宏剛氏の博士論文は、このような代替機能を持たない代詞を考察対象とし、それらが文或いは発話において如何なる主観的特徴を有しているかについて、共時的な側面から追究したものである。また同時に、通時的手法を用いて代詞の主観化ルート及び主観化のメカニズムを検証し、各種代詞における主観化の異同が代詞本来の語義的特徴と密接に関連していることを明らかにしている。

中国語における主観化研究は、これまで副詞、助動詞、語気詞といった範疇で限定的に取り上げられてきたものの、代詞の主観化を体系的に分析し、且つその内実について明らかにした研究は未だ見られない。このような状況において、本論文は、現代中国語における代詞の主観化ルートやメカニズムの解明に焦点を当て、豊富な用例を用いて一連の考察を展開しており、合理的且つ包括的な代詞の主観化体系を構築することに成功している。各類型の代詞の主観化ルートや主観化の制限要素を明らかにし、中国語における代詞の主観化研究の基礎を築いた点において、本博士論文の学術的価値はきわめて高いと言える。

論文の概要

趙宏剛氏の博士論文は序章、終章を含む全 9 章で構成されている。

第 1 章ではまず、現代中国語における代詞の主観化及び本論文に深く関わる概念(主観化、主観性)とその意味属性について考察した。また、代詞の主観化に関する代表的な研究を概観した上で、本研究の問題意識及び研究手法について説明を行った。

第 2 章では、“不管他”における“他”の指示機能の虚化(指示対象の曖昧化及び消失)を起因として、“不管”と“他”の間に再分析(reanalysis)が誘発されたことを指摘した。これ

により“不管他”は語彙化(semanticization)され、その主たる語用的意味を「事態あるいは已然の行為に対し、発話者の無関心な態度を表す」ことであると結論付けた。また、否定フレーズ“不管他”がモダリティマーカ―となるまでの文法化プロセスについて通時的に分析した結果、モダリティマーカ―“不管他”の形成には、“他”の指称機能の虚化が大きな影響を与えていることを明らかにした。そして、“不管他”自体が<無関心>という意味特性を備えることに起因し、“他”も文脈的意味吸収(absorption of context)によって発話者の主観性を表す役割を担うようになったということを指摘した。

第3章では、疑問代詞“谁”“什么”が元来の疑問用法とは別に、専ら発話者の<不満>や<否定>的な感情を表すケースについて考察を行い、“谁”“什么”が表すこのような意味特性は反語文によるものではなく、あくまでその前後に用いられる語句によるもの、即ち文脈的意味吸収に大きく影響されるものであることを論証した。本章ではまた、<不満>や<否定>的な感情を表す“谁”“什么”を用いる発話意図について語用論的な観点から考察し、その結果、“谁”“什么”を用いる表現形式には「反発」と、質問に対して適切な情報を提供しないという「回答回避」の二つの意図が含まれているため、発話者の反発的な語気を高め、自分自身の観点や立場などを堅持することに有効であることを指摘した。

第4章では、“怎么样”の各種用法(疑問、反語、婉曲)を通時的に比較対照し、その主観化ルートを考察した結果、発話者の主観を色濃く反映する<先見性>用法は反語用法から派生したものであることを明らかにした。“怎么样”の否定疑問用法は、語用論的には一種の非疑問用法であり、発話者自身が持つ確固たる意見や主張に基づき、相手に対して否定或いは反発的行為を行うものである。一方、文法機能としては、“怎么样”の<先見性>用法は反語用法と同様、一種の非疑問用法であると考えられる。つまり、“怎么样”の反語用法と<先見性>用法は統語的にも語用的にも共通する機能を有しており、メタファーという文法化メカニズムが誘発されることで、反語用法から<先見性>用法が派生されたと結論付けた。

第5章では、中国語の指示代詞“这”“那”において<性状の程度>を表す用法が如何に形成されたかという問題に着目し、その文法機能及び形成メカニズムを共時的・通時的観点から考察した。まず、性状の程度を表す“这”と“那”の互換性及び“这”“那”の文法的・語義的特徴を考察した結果、“这”“那”の程度用法と指示用法は密接に関連しており、“这”“那”の指示機能の虚化が、程度用法が形成される要因となっていることを明らかにした。また、性状の程度を表す“这”“那”が形成されるメカニズムに関し、通時的に実例調査を行った結果、①“这”“那”の程度用法は、“这/那+NP”形式から“这/那+VP”形式が派生した結果、形成されたものであること、②“这/那+VP”形式における“这”“那”が副詞的な振る舞いをするようになり、次第に性状の程度を表す語義的機能を獲得し、さらに、文脈的意味を吸収することにより、“这”“那”の程度用法としての地位が確立されたことを論証した。

続く第6章では、第5章で明らかにした“这”“那”の虚化ルートを分析の足がかりとして、本来ならば指示機能を果たすべき指示代詞が、どのようなルートを辿って性状の程度を表すようになったかについて考察を行った。指示代詞“如此”“这样”“那样”を取り上げ、通時的

別紙 1 - 2

な検証を行った結果、①中国語の指示代詞には<指示>から<程度>への語義形成モードが存在すること、また②「性状を指す」という語義的特徴がこのような語義形成モードの確立に大きく関与していることを論証した。

第 7 章では、これまでの考察で明らかとなった結論を総括し、中国語における代詞の主観化の特徴と各類型の主観化メカニズムの相違点を体系化した。まず、各種代詞(人称代詞・疑問代詞・指示代詞)の主観化は、文法化メカニズムに直接関与していることを指摘した。即ち、人称代詞“他”と指示代詞“如此、这样、那样”の主観化は再分析によって、疑問代詞“怎么样”と指示代詞“这、那”の主観化は類推(analogy)によって、疑問代詞“谁、什么”の主観化は文脈的意味吸収によって支配されたものである。また、各種代詞の主観化の過程においては、文脈的意味吸収の関与が欠かせないものであることについても論及した。主観化された代詞が存在する一方で、主観化されない代詞も存在する。本研究の考察において主観化された代詞が「行為・事態」を指すのに対し、「数量」を指す疑問代詞“几、多少”や「場所」を指す指示代詞“这里、那里”は実際の発話行為において主観化されることはない。本章では、認知言語学的な視点から、「性状を指す」という語義的特徴が備わっていないことが場所を指す指示代詞や時間、数量を尋ねる疑問代詞の主観化を制限する要因であると指摘した。

論文審査委員会による審査及び合否判定

口述試験では、学位申請者から博士論文の内容に関して説明が行われた後、審査委員からそれぞれにコメント及び質問がなされ、学位申請者との間で綿密な質疑応答が行われた。

審査委員から寄せられた主な指摘、質問、コメントを以下に記す。

(1)本博士論文では、代詞の代替機能の有無を文脈中に指示対象が示されているか否かに基づいて判定しているが、特に過渡期においては、明確な照応詞が示されずとも百科辞書的知識を照応する例も散見されることから、指示対象の有無を以て代替機能の有無、即ち主観化の有無を判断することに疑問が残るという指摘があった。こういった事例も含め、主観化の有無、強弱をどのように判定するかについては、今後の課題とした。

(2)本博士論文第 2 章のタイトルからも分かるように、趙宏剛氏は指示機能が虚化した代詞“他”自身に<無関心>義を読み取ろうとしているが、これはモダリティマーカと化した“不管他”が兼ね備える意味特性であり、“他”自身が<無関心>を表すとするのは無理があるという指摘がなされた。これに対し、趙氏は“他”はその歴史的成り立ちからしても、他の人称代詞とは一線を画するものであり、元来主観性の強い語であると説明がなされたが、この点に関しては、論文中でも注で触れられている程度であるため、議論を整理し、加筆修正することが求められる。

(3)本博士論文では複数の章に渡って、コーパス(CCL 语料庫)を用いて代詞の通時的変遷を考察しているが、当該コーパスの特長や検索手法を論文中に明確に提示するべきであるという指摘がなされた。特に用例の初出時期や変遷の過程を記述する章においては、コーパ

スの検索条件は論文の信頼性を左右するものであるため、この点に関し加筆修正が求められる。

(4)本博士論文第7章では、研究の総括がなされているが、ここで改めて導入されている「再分析」「類推」「文脈的意味吸収」については理論的な支えが弱く、事例と概念の結びつきが弱いことが指摘された。本論文は豊富な事例を用いて、一つ一つ丹念に分析を積み重ねていくその手法が評価される一方で、理論的枠組みの中で代詞の主観化現象を捉え直す作業については、今後の展開が期待される。

このような不備不足及び改善点、今後の検討課題などが指摘されたものの、本論文は、これまで中国語学界において個別事象の指摘のみに留まっていた各種代詞の主観化現象をそれぞれの特徴に基づいて類型化し、包括的且つ合理的な体系構築に寄与した点において学術的価値を有するものであり、今後さらなる発展を期待できる論文であることが確認された。

以上の評価から、審査委員が全員一致して、本論文は博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。したがって、本論文を合格とした。